

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

Data

監督・脚本・撮影：モハメド・アル
ダラジ

出演：ヤッセル・タリーブ／シャー
ザード・フセイン／バシー
ル・アルマジド

バビロンの陽光

2010年・イラク、イギリス、フランス、オランダ、パレスチナ、UAE、エジプト合作映画
配給／トランスフォーマー
90分

2011（平成23）年5月26日鑑賞

東映試写室

👁️👁️ みどころ

日本は今、3. 11東日本大震災からの復興で大変だが、2003年に始まったイラク戦争によってフセインが倒れても、大量虐殺されたイラク北部のクルド人たちはもっと悲惨。そんな現実を、祖母と孫の2人のロードムービーからしっかり確認したい。

集団墓地に見る白骨死体の列にはビックリ！2人が古都バビロンに残るといふ空中庭園を見る頃には・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■しっかり現実と向かい合おう。そして・・・■□■

イランやイラクは日本にとって遠い国だが、2003年3月に始まったイラク戦争や、それによるサダム・フセインの失脚は現実起きた事実。また、2010年12月に始まったチュニジアでの反政府デモ（ジャスミン革命）を契機として、カダフィ大佐が支配するリビアでも2011年2月19日に大規模反政府デモが発生し、以降カダフィ政権VS反カダフィ政権に分かれて騒乱状態になっているが、それも現実だ。

日本は今、3. 11東日本大震災の現実とそれに伴う福島原発事故の現実の前に立ちすくんでいる。しかし、復興のための新たな力を得るためにも、本作のような映画から底知れない悲しみを感じるとともに、愛する人を求めることの尊さや未来を信じる心の強さを感じ取らなければ・・・。

■□■悲しく重いロードムービーだが■□■

ロードムービーはたくさんある。若き日の医学生だったチェ・ゲバラの日記を基にした

異色の映画が『モーターサイクル・ダイアリーズ』（04年）だったが、これは彼の前向きのみずみずしい感性のほとばしりを随所に見せたロードムービーだった（『シネマルーム7』218頁参照）。しかし、戦地に赴いたまま帰らないクルド人の息子を探す旅に出る祖母（シャーザード・フセイン）と12歳の孫アーメッド（ヤッセル・タリーブ）のロードムービーである本作は、ひたすら悲しく重い。本作はフセイン失脚3週間後から始まるが、ドキュメンタリーではなく、あくまで劇映画だ。

バビロンの庭園という言葉は聞いたことがあるが、一体それは何？ 2人のロードムービーは、空中庭園の伝説が残る「古都バビロン」までの900kmにも及ぶが、そこから私たちが感じとれるものは？

■祖母は、なぜムサを排除？■

テレビで氾濫するアホバカ・バラエティーに見慣れた目には、90分間通して本作を観るのはしんどいかもしれない。祖母とアーメッドは何か明確な資料を持って誰かを訪れるのではなく、あくまで息子を探す旅に出ただけ。何せイラクはまだ戦後の混乱期だから、車に拾ってもらうのがひと苦労なら、バスターミナルでバスに乗るのも大変。本作のカメラはナシリア刑務所をはじめいくつかの集団墓地を訪れる2人の姿を追っていくが、そこで見る風景は平和で豊かな日本では到底考えられないものばかりだ。

そんな旅の途中、バスの中で知り合い何かと2人の手助けをしてくれた男がムサ（バシール・アルマジド）。しかし、クルド語を話すムサを見て、ムサが昔フセインに雇われてクルド人を大虐殺した兵士だと知った祖母は、ムサを排除。12歳のアーメッドにはそのワケがよくわからないが、ムサの登場によってイラク戦争当時の複雑な政治、軍事情勢が少しだけ明らかにされる。しかし、よほどしっかり勉強しなければ日本人の私たちにはそれはわからないはず。「おまかせ民主主義」から脱却し自立した日本にするためには、やはり本作のような映画からしっかり勉強しなければ・・・。

■監督は？「イラク・ミッシング・キャンペーン」とは？■

日本でも原爆被害者や「先の大戦」の体験者世代が次々に減少しているが、1978年にバグダッドで生まれた本作のモハメド・アルダラジ監督は、多感な青年時代にイラク戦争と向き合わなければならなかった世代だ。もちろん映画監督（映画作家）になるためには、専門的な勉強が不可欠だが、プレスシートによると、私と同じように彼も幼い頃から、両親に内緒で毎週のように映画館に通い、インドの最新映画を観ていたらしい。しかし映画監督以外の道は考えられなかった彼はまさにその夢を実現させたわけだが、彼が映し出す映像のターゲットはあくまでイラク戦争の現実。

本作に見るような、人骨が何百体も並べられた集団墓地を私はこれまで見たことがなかったが、過去40年間で150万人以上が行方不明となったイラクでは、300の集団墓

地から何十万もの身元不明遺体が発見されているらしい。モハメド・アルダラジー監督はそんな現実の中で、本作完成後身元確認を促進する「イラク・ミッシング・キャンペーン」を発足させたとのことだ。今や日本の自衛隊がすっかり去ってしまったイラクの情勢について日本人はほとんど無関心だが、本作に見る厳しい現実は今こそしっかり見据える必要があるのでは。日本は今、3.11東日本大震災からの復興で大変だが、イラクについてそんな問題意識を持ち続けるためにも、本作の鑑賞は不可欠だ。

2011（平成23）年5月28日記

あなたはネット派？それともハガキ派？

1) 近時、日本の若者にはツイッターが大はやりだが、ツイッター議員と呼ばれる政治家も多い。これがうまくハマれば多くの賛同者を獲得できるが、逆に反発をくらうと大変だからその活用法は難しい。鳩山由紀夫元首相の言葉の軽さには多くの日本国民が辟易させられたが、そんな彼が発信したツイッターは百害あって一利なし？言葉にはそれなりの重さが必要ははずだ。

2) 他方、一党独裁国家の中国には日本のような言論の自由などないから、ツイッターなどはやるはずがない。そう思うかもしれないがそれは逆で、表現の自由がないからこそ、微博（ウェイボー）と呼ばれる中国語のツイッターは貴重なコミュニケーションの手段で今や中国では3億人が活用しているというから驚きだ。『われ日本海の橋とならん』は中国でもっとも有名な日本人と呼ばれる27歳の加藤嘉一氏の著作。流暢な中国語とクレバーな応答で一躍中国メディア界の寵児となった彼は、年間300万件以上の取材を受けるらしいから、彼のツイッターへの反応は年間数十万件？

3) 赤いポストに住所を書いたハガキを投げ込めば、日本国中どこにでも届けられるという制度は明治国家になって成立した。今ハガキは50円だが、私がハガキを使うのはお礼状を出す時ぐらい。事務所だより新年号をつくり始めてからは年賀状も出してないが、お正月にこれを受けとるのは格別だ。また細かい字でピッシリ書き込んでくる友人もいるが、これならハガキも値打ちがある。

4) 新藤兼人監督の『一枚のハガキ』は、こんなIT全盛時代に1枚のハガキの重みを考えさせる絶好の教材だ。遺言書はもちろん、ラブレターも本来その内容は絶対秘密だから必ず封書になるが、ハガキは誰の目にも触れるものだから書く時からそれを意識する必要がある。「今日はお祭りでありますが あなたがいらっしやらないので 何の風情もありません。友子」と書かれた一枚のハガキは誰でも読むことができるが、この言葉の奥に隠された兵士への妻の想いとは？

5) しかして、あなたはネット派？それともハガキ派？

2011（平成23）年11月9日記